甕型厨子における近世紀年銘資料

吉田健太

1．はじめに

那覇市立壺屋焼物博物館は、平成25年3月に門上秀叡・千恵子両氏が収集した厨子（蔵骨器）および沖縄関連資料4830点を収蔵した。今後、このコレクションを旧所蔵者の名前を冠し「門上秀叡・千恵子コレクション」として、那覇市立壺屋焼物博物館において保管・研究および展示公開し、活用していく予定である。購入、資料の運搬、修復、および2014年11月から開催される特別展については、沖縄振興特別推進交付金（壺屋の歴史・文化発信事業）が活用された。18世紀の年号が入った蔵骨器「壜」は那覇市指定文化財に指定されているなど、多岐にわたる厨子の世界を表現しうるものである。資料の整理に際して、コレクションの中には紀年銘が記載されているものが多く含まれていることが確認された。本稿では、その中でも銘書が確認された甕型厨子に焦点を当て、当資料の紹介および検討をおこなうものである。

2．厨子の概要

厨子は、沖縄における蔵骨器の総称である。本来、厨子は「仏像・経巻を安置する両とびらの箱。単に書物や食物などをたくわえる箱」である。しかし少なくとも乾隆元年(1736)には厨子の名が「四本堂家札」に使用されていることから、この頃には厨子の名称が使用されていたと考えられる（浦添市教育委員会　1985)。琉球では人の遺骨を再葬して墓に埋納する習慣があり、厨子の分布は、奄美の島々から先島に至るまで、琉球諸島全域に及んでいると考えられている。ただし使用方法については地域差が認められる。沖縄内にあっても階層などで差異をつけることがある。支配層の間では、家を中心とする個別墓が発達し、厨子を個人または夫婦単位で使用することが一般的であった。

厨子が研究対象もしくは報告されるのは早く、1888年に西表島を訪れた田代安定が骨を納める壷があると紹介したことにはじまる。ただし、以降は陶芸品や民具としての扱いが多く、考古学的調査は行われなかった。それは、厨子自体が現在を生きる人々の祖先に深く関わるものであり敬遠されがちであり、またどのような文化財的価値があるのかということが考えにくかったため、というのが背景として考えられる。本格的な調査がおこなわれたのは、浦添ようどれにおける調査がはじまりである。これは1955～56年におこなわれた浦添ようどれ整備に伴う調査であり、調査の一環として収められた石製厨子の調査が行われている。調査の結果から、調査対象の厨子の製作工程を検証しているが、厨

よしだ　けんた（那覇市立壺屋焼物博物館学芸員）

子の報告については美術史的な記述が主であった（琉球政府文化財保護委員会 1957）。以後、1980年代になると、沖縄県内における発掘調査件数が増加し、それにあわせて古墓を対象とした発掘調査も実施されることとなる。那覇市のヒヤジョー毛古墓群、銘苅古墓群、真嘉比・古島古墓群、ナーチュー毛古墓群、浦添市の前田・経塚近世墓群、伊祖の入め御拝領墓、久米島町（旧具志川村）ヤッチのガマ・カンジン原古墓群、与那国町嘉田地区古墓群、など数多くの古墓群が調査され、大量の厨子が検出された。

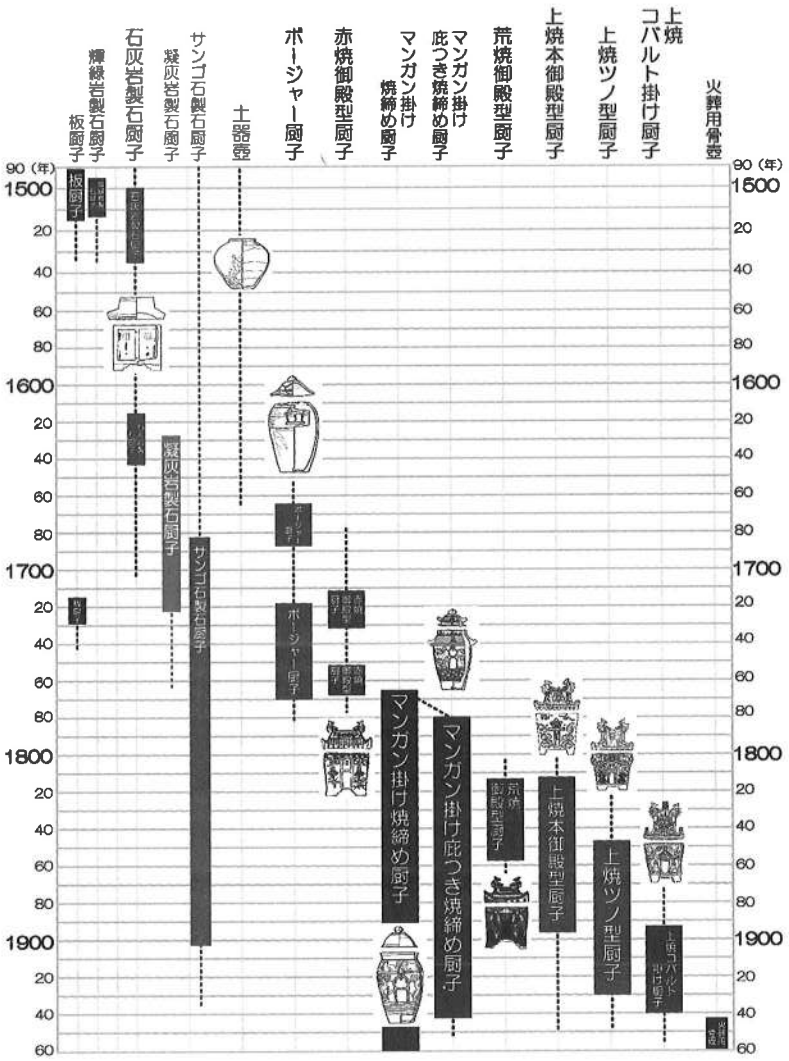


表１　厨子の編年（那覇市立壺屋焼物博物館 2005 より一部加筆・修正）

そのような中で、厨子における分類・編年の先駆けであったのが、名嘉真宜勝氏、上江洲均氏である（名嘉真 1978, 上江洲 1980）。特に上江洲均氏は、厨子を「素材・材質による分類」「器種や釉薬による分類」をおこなっている。そして器種ごと普及した時期の上限・下限の範囲を厨子に記された銘書との照合を基本として設定し、厨子の時期的な変遷を提示している。上江洲氏のつくった編年モデルは以後の厨子の編年研究の基礎となっており、また現時点における厨子の編年の基準となっていることより、本稿でもこれを基準として、厨子の年代を示す（表 1）。

表 1 で示されているように、厨子の上限年代は、1500 年前後あたりと考えられている。1500 年前後までは、中国福建省産の輝緑岩製の石厨子や漆塗りの板厨子が用いられていた。

ただ広く普及するのは 1700 年代以降と考えられる。木製の厨子を用いていたものが、次

第に腐食せず、耐久性の強い素材のものへと変化したと考えられており、陶器製のもののほか、珊瑚石灰岩や閃緑岩、凝灰岩などの石製のものがある。その後、1670年ごろまでの間をつなぐ骨壷の種類としては、本来は他の用途のために作ったのであろう土器壺や外来品を当てていたと考えられる。以後は素焼き壺の後を受ける形で、甕型のボージャー厨子が出現し、それよりややおくれて赤焼御殿型厨子が作られ、上焼本御殿型厨子へと移っていく。その間も石製は引続き作り用いられている。以下、各陶製厨子の詳細を記述していく。

ボージャー厨子は、上限を康熙9年（1670年）とする古いタイプの陶製甕型厨子である。形状は、口縁が丸縁で、胴部には入口の庇がはっきりつけられ、庇の屋根は板葺き状になっている。全体に薄手で泥釉をかけたような窯変が一部に認められ、ふたは笠状の蓋で、頂上には宝珠のつまみがあり、屋根には唐草文の釘彫りがほどこしてある。胴部には、横から背後にかけて、蓮華の線彫りがなされている。ボージャー厨子と一括りにはしているが、その中でも時期的に2タイプに分けられる。　前者の系統は1670年～1720年ぐらいまでのもので、上記した古いタイプのものである。後者の系統は、雍正10年（1732）を初めとして、1790年ごろまであるもので、特に1730年代から70年ごろまでに集中しているものである。赤っぽい甕型が多くなり、全体的に厚ぼったく、胴部には線彫りがほとんどない。このタイプは、乾隆年間の一大特色をあらわす形状である。後者の系統の時期は赤焼の御殿型とも時期的にはつながる。古い墓にはかなり見られるもので、「四本堂家礼」に出る厨子というのも時代的にみて、このボージャー厨子といえる。（上江洲　1980）。なおボージャー厨子については金武正紀氏や西銘章氏により詳しい検討がなされている、（金武2005，西銘2003，2004）

マンガン掛け焼締め厨子は、ボージャー厨子がしだいに少なくなる1770年代に、取ってかわるように出てくるものである。全面にマンガンを掛けた黒っぽい焼締めの陶製厨子である。水甕を細くした形でつくり、正面の胴部には瓦屋根をかたどったものを張り付けている。このマンガン掛け焼締め厨子は、陶製厨子の数あるタイプの中で最も多く、庶民向けのものであると考えられる。戦後までつくられるが、だんだん口が大きく細型になり、張りつけと線彫りを適当に混ぜたものが多くなる。

マンガン掛け庇つき焼締め厨子は、マンガン掛け焼締め厨子より少し遅れて出現するとされる。19世紀中期に型の上で完成し、昭和10年代までつくられる。特徴としては、胴部に瓦屋根の庇をつけた張りつけである。また、胴部に蓮華や法師像や普通の花をつけ、蓋や庇には龍を正面に置き、獅子頭を四方に配し、小さな丸玉を張り付けるなどしている。

続いて、形状は御殿型（家型）にうつっていくとされる。18世紀前半に登場し、初期のものは赤焼である。発生的には石厨子から家型を陶土におきかえた様相を呈する。赤焼のものは、初期のころの屋根は入母屋であるが、後に寄棟になる。乾隆年間の1770年代に集中する。文様の特徴としては、全面に石灰塗装を行っており、その上に朱と墨による蓮華を描いている。屋根の部分には、シャチホコをつけており、シャチホコの下には獅子

頭の鬼瓦をつけている。

荒焼御殿型厨子は、赤焼の少し後の19世紀前半から中期ごろまでに集中している御殿型厨子である。形は赤焼御殿型厨子の後を引くが、焼締め方としてはマンガン掛けの甕型と同じ系統を持つ。屋根のシャチホコも、赤焼のものと比べ、大きく形も整ってくる。屋根は単層だけでなく2層になったものが多く、入母屋の変形もしくは切妻型とされている。

上焼本御殿型厨子は、上記した荒焼御殿型厨子とほぼ同時期である、19世紀前半から19世紀後半頃に集中してみられる厨子である。特徴としては、飴釉、緑釉、呉須といった多種の釉薬を用いた色鮮やかな装飾である。また、シャチホコ、獅子、龍を屋根に配しているものが多い。

以上のような本御殿型に対し、一般普及型であったといえるのが上焼ツノ型厨子である。俗にソーベーとも言う。19世紀中頃から昭和初年頃まで多く作られていた。多種の釉薬を用いていることから色調は美しい。形の特徴としては、屋根の上層部がかなり高くなっており、屋根の各部にはツノ状の突起を有している。このツノは、その上に皿や碗等の他の雑器をのせて焼くための台ともなっている。これは焼き上げる際に窯内のスペースを効率よく使用するための知恵である。

最後に明治以降に輸入されるようになった西洋コバルトを全面にかけた上焼コバルト掛け厨子がある。明治34,5年頃から戦後まで普及し、特に大正年間に多く用いられたと考えられる。色調は色鮮やかな青が主体となっており、飴釉を部分的に用いるものも見られる。形の特徴としては、屋根の上層部が高くなっており、上焼ツノ型厨子と似ている。ツノはなく、シャチホコ・獅子・龍頭などの張り付け装飾が多く見られる。なおボージャー厨子以降のものにおいては、安里進氏により、装飾による編年および銘書による墓内の家族史の研究というものが詳しくなされており（安里1997,2003,2006）、現在浦添市で調査されている前田・経塚近世古墓群において研究がすすめられている。

以上のように、器形や文様に着目して、厨子のそれぞれのタイプの研究はすすめられている。しかし、それを実年代にあてはめることは困難な作業となる。厨子のほとんどが墓の中にあることから、考古学の根幹となる層位からの年代判断ができないというのがある。そこで厨子編年と実年代をすりあわせるのに重要になるのが、厨子に書かれる銘書である。銘書とは、蔵骨器に記された墓誌銘を指す方言である。その主な記載内容としては、被葬者の姓名、位階、死亡・洗骨年月日などが挙げられる。銘書は基本的には墨書で記され、蔵骨器の蓋と身に記されることが多い。また身の屋門内や口唇部に記されるものもある（鈴木2014）。これにより、被葬者の身分を判別することが可能となる。また銘書が基準となり、厨子編年と銘書年代とあわせることにより、考古学の分類ははじめて歴史の中で意味を持ってくる。「門上秀叡・千恵子コレクション」には年号を含む銘書が記されている厨子が数多く所在する。今回はその中でも甕型厨子に着目していく。

3．紀年銘入厨子の概要

本稿で紹介するのは、総計23点の紀年銘入り厨子である。1点ごとの計測数値および銘書に記された年号・銘書を記録し、記録し、各厨子の実測をおこなった（表２・表３）。

厨子１は六角形の形状を有した脚付厨子である。色調は蓋、身ともに赤色が強い。若干身の方が強い印象を受ける。蓋は側面および頭頂部が欠けている。上から見ると、蓋の形状は六角形となっている。貼り付けの帯で分割されてはいるが、蓋の全面にわたり一本の唐草文が貼付けで装飾されている。裏面には銘書が墨書きされている。身は数カ所欠けており、ヒビまた接合跡が多数確認できる。六角形の形状の庇が付いている。庇の各隅には鳥の頭部をかたどった装飾が確認できる。その下に文様帯が確認できる。正面と思われる屋門部分は欠如しているため確認する事はできないが、花瓶らしき貼り付けの装飾は確認できる。また正面下部には花弁が貼り付けで装飾されている。胴部周囲には法師像、蓮華が貼り付けで装飾されている。法師像は無釉のものと、マンガン釉で施釉されたものの２種類ある。胴下部文様帯には唐草文が線彫りされている。底部には脚が六脚ついている。

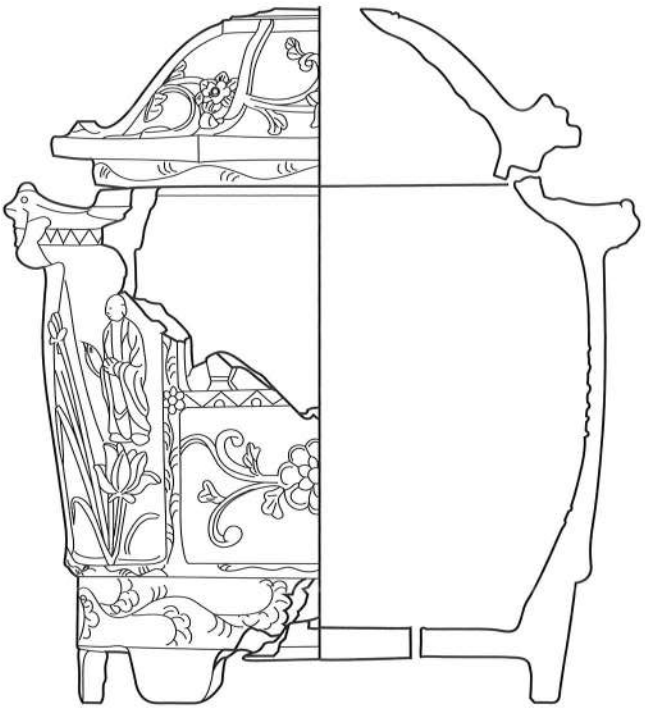
厨子２はボージャー厨子である。蓋、身ともに表面は黒くボテッとした釉薬で施釉されている。内側は無釉である。蓋頭頂部には擬宝珠がついており、周囲には簡易な唐草文が線彫りされている。内側には銘書が墨書きされている。蓋は身の口縁部の外側にかぶさるような形状となっている。身はボージャー厨子の形状を持つ。焼き締めは強く、かなり重い。口縁部は若干たつ傾向が見られ、前期ボージャー厨子の様相が見える。上部には釉剝ぎが長方形の数カ所見られる。マド枠は平葺形の１方４円である。

表２　厨子観察一覧表

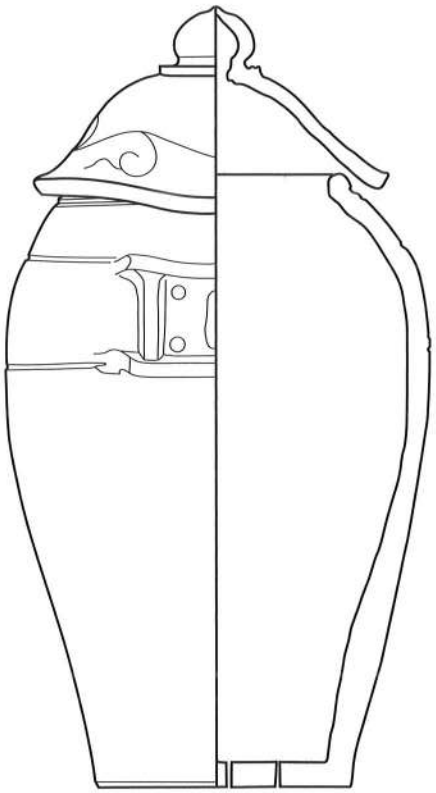
整理番号	図版番号	種類	蓋（cm）		身（cm）				死去年	洗骨年	備考
			高さ	口径	高さ	口径	胴径	底径			
189	厨子1	甕型	15.5	37.5*43.1	43.4	35.6	44.3	37.5		1715年	
92	厨子2	甕型	15.7	29	51.3	24	34.7	20.7		1724年	
4	厨子3	甕型	—	—	52	25	41.4	21	1714年/1718年	1727年	
壜	厨子4	甕型	17	33.8	49.6	29.4	42	25.2	1667年/1660年		改納1727年
7	厨子5	甕型	14	29.8	60	33	45	23.5		1732年	
186	厨子6	甕型	—	—	41.9	22.9	34.8	17.9	1732年？	1732年？	
11	厨子7	甕型	14	38*41.5	53	31	44.5	28		1735年	
37	厨子8	甕型	0	0	47.1	24.8	33.2	18.7		1737年	
67	厨子9	甕型	13.3	31.4	53.3	27.7	37.7	28	1737年？/1742	1737年？/1742年？	
14	厨子10	甕型	—	—	60.5	30.4	45.3	29.8	1753年	1754年	
44	厨子11	甕型	—	—	48	27.5	32.7	21.7		1775年	
25	厨子12	甕型	19.5	33	54.5	32	44.6	22.6		1778年	
66	厨子13	甕型	0	0	49.2	30.3	34.3	21.8	1782年	1782年？	
K-8	厨子14	甕型	10.5	26.5	57	27.5	40.5	25	1790年？	1790年？	
185	厨子15	甕型	15.7	30	48.8	27	37	20	乾隆年間		
178	厨子16	甕型	18.2	33.8	67.5	34.2	48.3	26.4	1798年？	1798年？	
53	厨子17	甕型	17	31.5	57	30	37.1	23.5	1801年	1801年	
18	厨子18	甕型	17	29.9	51	29	39.7	24.6		1813年/1816年	
K-4	厨子19	甕型	16	26	53.5	28.2	38.7	25	同治年間？	同治年間	
188	厨子20	甕型	16	28.8	52.3	28	33.5	21	1893年	1900年	
180	厨子21	甕型	14.5	33.2	67	34	48.3	23.5	1903年		
56	厨子22	甕型	—	—	49.5	27.3	34.2	21.4	明治40年代？	明治40年代？	
K-7	厨子23	甕型	14.5	33.5	52.5	26.2	29	19.4	1932年	1944年	

0 30cm

S=1/6



厨子 1



厨子 2

厨子 3

厨子 4

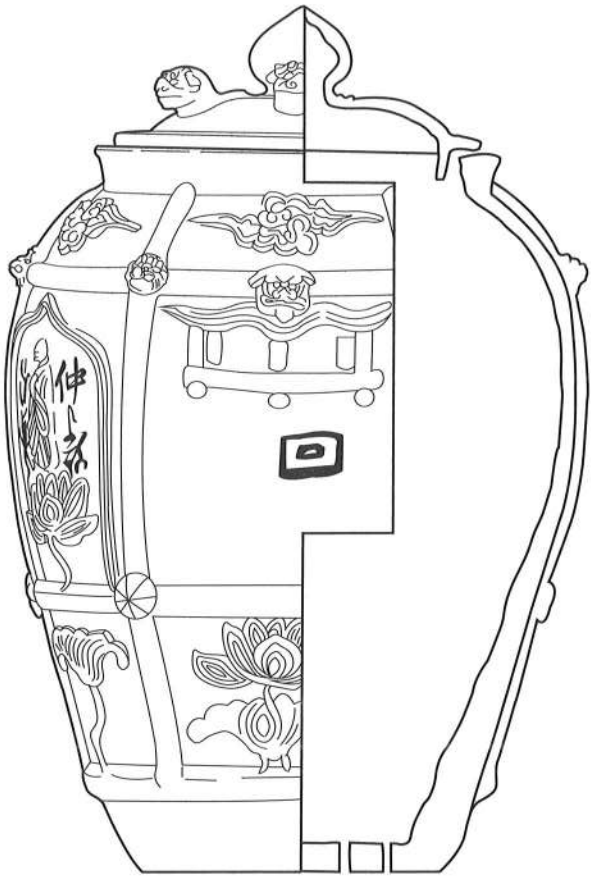
厨子３はボージャー厨子である。蓋はなく、身のみである。表面を見ると、焼き締めが強く、またかなり重たい。口縁部は内側に向かって丸みを帯びており、口唇部には数カ所の欠けが確認できる。肩部には唐草文の装飾が全体に装飾されている。また小さいものの、作者と思われる印が押されている。胴部は貼付けられた帯により６分割されている。正面には銘書が線彫りで施されている。書体は達筆の印象を持つ。他５面には蓮華が一つずつ線彫りで描かれている。

厨子４はボージャー厨子に類似する。蓋、身ともに釉薬は施されていないが、焼き締めが強く、重たい。厨子３と類似する。蓋は頭頂部に擬宝珠が確認できる。その擬宝珠を中心として５本の帯が見受けられ、その端には装飾が施されている。帯と帯の間には蓮華文が線彫りで施されている。身の口縁部は内側に湾曲しており、丸みが見られる。口唇部には長方形の跡が数カ所確認できる。身の正面には銘書が線彫りされている。書体はいずれも達筆である。また肩部周囲には貼り付けの唐草文で装飾されており、華・葉・唐草いずれも精巧な作りが見られる。なお当厨子は、那覇市指定文化財として登録されている。

厨子５はかなり大きめの厨子である。蓋は擬宝珠が付いており、六方向に獅子の頭部を模した彫刻がついている。蓋の裏側に銘書が墨書きされている。蓋をかぶせると、若干身の口縁部がはみ出るものの、口縁部内側に収まる形状をしている。身は施釉されていない。胴部の張りが強い甕型の形状をなしているものの、口縁部や装飾部分はマンガン掛け焼締め厨子の特徴を持っている。口縁部は直行に角を作る形状をしており、蓋と接する面は平坦に形成されている。肩部・胴部・胴下部は６面の装飾が形成されている。肩部装飾帯には６面全てに雲形を型取りした装飾が貼付けてある。いずれも同じ装飾と考えられる。同部装飾帯には正面にはマド枠の唐破風形が形成されている。孔は３つである。その上に獅子の頭部を象ったものがなされている。マド枠の下には墨書で「回」と記されている。他の５面にはいずれも位牌形の屋門が施され、屋門内に蓮華文にのった法師像の装飾が施されている。位牌・法師像・蓮華いずれも貼り付けである。胴下部装飾帯には蓮華文の装飾が貼付けで表現されている。正面のみ蓮華文の下部に葉が表現されており、他の５面は蓮華のみの表現にとどまっている。底部には孔が複数空けている。

厨子６は壷形の厨子である。蓋はなく、身のみである。表面は黒釉で厚く施釉されているが、均等に塗られているのではなく、底部周辺には流し掛けした痕跡が随所に見られる。また正面には銘書が線彫りされている。銘書が施されている部分の裏側が釉薬のムラが多く見られる。口縁部は直口型であり、口唇部は平坦に形成されている。なお口縁および口唇部には釉薬は施されていない。内面は施釉されていないが、数カ所黒釉が垂れた跡が見受けられる。内面の色調は、暗い赤色である。

厨子７はボージャー厨子である。蓋、身ともに無釉陶器である。全体的に焼き締まっており、重たい。蓋は頭頂部に小さな擬宝珠を有している。また上から見ると六角形の形状を有しており、各角には鳥の頭部の形状の装飾が施してある。身は胴部が張る形状を有している。口縁部は少し内湾している。また口唇部の厚みは若干ある。正面には寄棟形のマ

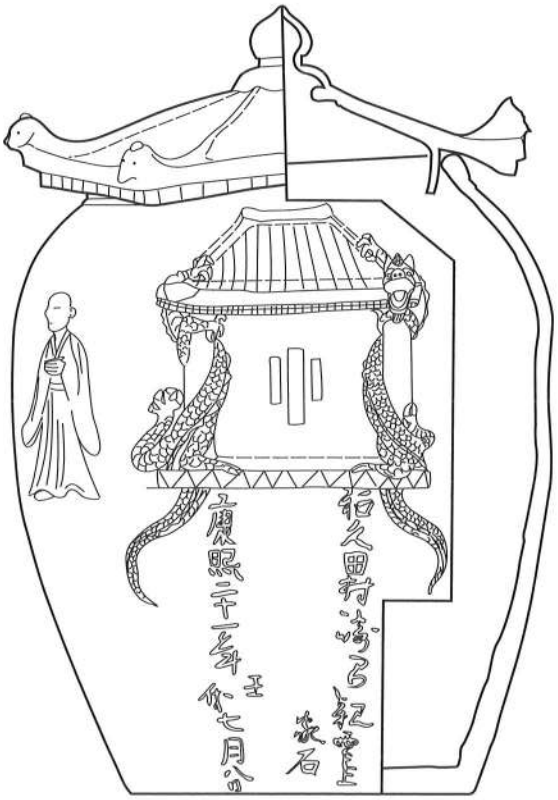


0 30cm

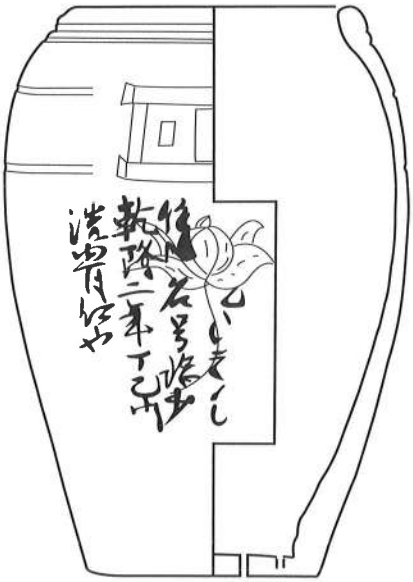
S=1/6

厨子5

厨子6



厨子7



厨子8

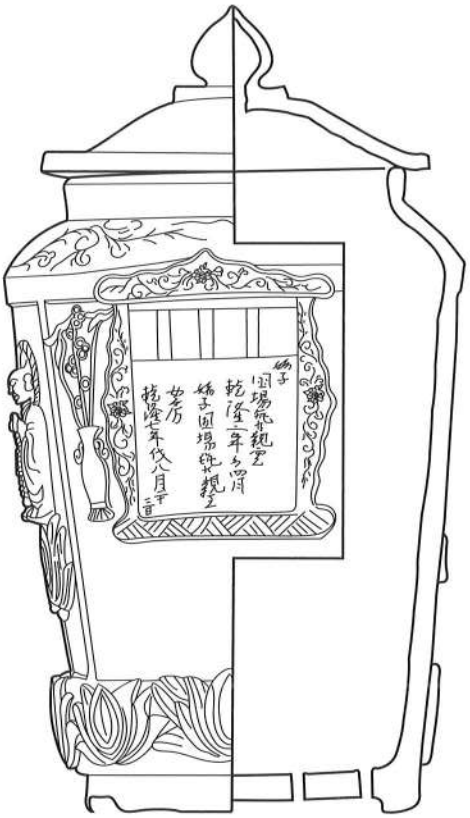
ド枠が見受けられる。孔は３つ方形で空けてある。またマド枠両脇には龍が巻かれる装飾が施されている。またマド枠下部には銘書が線彫りされている。また胴部周囲には法師像の装飾が貼付けられており、計６体が確認できる。法師像はそれぞれ持っているものが異なる。

厨子８はボージャー厨子である。蓋はなく、身のみである。重みがあり、色調も赤よりも灰色が強く見られる事から、焼き締めは強いものと考えられる。口縁部は丸みがあり、肥厚を感じさせる。２カ所に黒色の釉薬が付着されているのが確認できる。剥離している面も見られ、重ね焼きをしていた跡が確認できる。ボージャー厨子でも前期に位置するものと考えられる。底部には径 2mm ほどの孔が 10 箇所空けてある。正面にはマド枠が設置され、孔は３つ確認できる。平葺形１方２方である。蓮弁文は、窓に向かって右側と窓の下面の計２つ確認できる。前者は大きく、後者は小さい。どちらも線彫りであるが、後者の蓮弁は前者と比べて線彫りの深さが若干深い印象を受ける。蓮文は２つとも簡易的なものであり、花のみが描かれそれ以外の装飾は少ない。また背面には窯印らしきものと、不明の文様が線彫りされている。銘書はマド枠下に墨書されている。

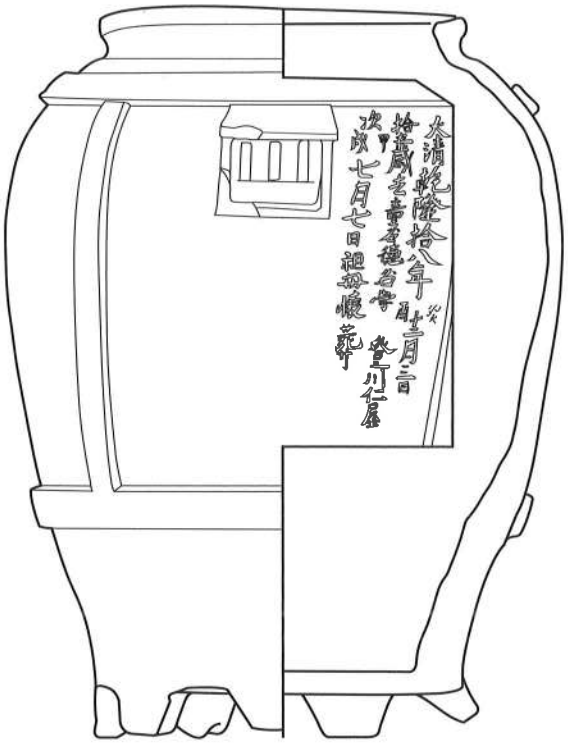
厨子９は脚付厨子である。蓋、身ともに釉薬は施されていない。蓋と身では色調が異なる。蓋の焼き締めが強い印象を受ける。蓋の頭頂部には擬宝珠が付いている。表面には特に装飾などは確認できない。裏面には銘書が墨書きされている。身は、肩から底部にかけて大きく径が変わらない形状を有している。口縁部は直口しており、口唇部は若干の丸みが確認できる。肩部文様帯には唐草文が全面に線彫りされている。胴部文様帯には正面には銘書が線彫りで施されている。書体は達筆である。その銘書上には３つ孔が空けられており、それを枠で囲む装飾がなされている。両側面には花が挿された瓶が貼り付けで表現されている。そして蓮に載った仏像が２体ずつ貼り付けで装飾されている。描写はかなり細かい。裏面には植物の文様が貼り付けで装飾されている。胴下部には全面に蓮華文が所狭しと貼付けられている。底部には幅の広い脚が３つ確認できる。

厨子１０は脚付厨子である。蓋はなく、身のみである。色調は全体的に赤色が強い。胴下部は少し黒色が混じる。胴部が張る甕型の形状をなしているが、底部において脚が７つ確認できる。口縁部は外縁がつく形状をなしている。上部はやや内面に向けて落ち込むような形状をしている。胴部は帯が貼付けられ、正面、両側面、背面の４面に分けられる。正面にはマド枠が寄棟形となっており、孔は３つ開いている。屋根は突き出す形をしているものの、瓦などの表現は見られない。その他３面には帯で囲まれているのみで、目立った装飾などは確認できない。マド枠に向かって右側に線彫りで銘書が施されている。字体は達筆の印象を受ける。

厨子１１はボージャータイプの厨子である。蓋はなく、身のみである。釉薬が施されていない無釉陶器である。全体的な色調は、暗赤色である。口縁部は直口で立っており、口唇部は平坦に形成されている。正面にはマド枠が確認でき、平葺形の１方２円の形状をなしている。マド枠の両側面には法師像が貼り付けで装飾されている。また文様の印が押さ



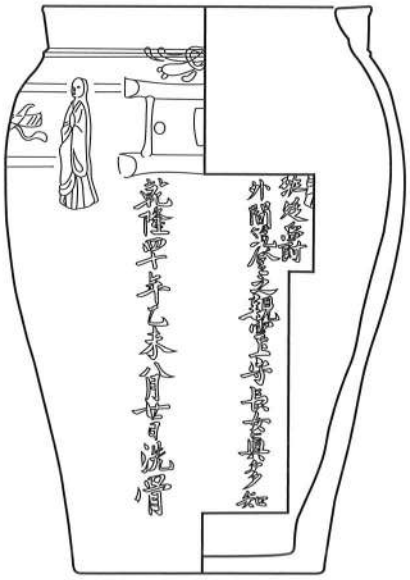
厨子 9



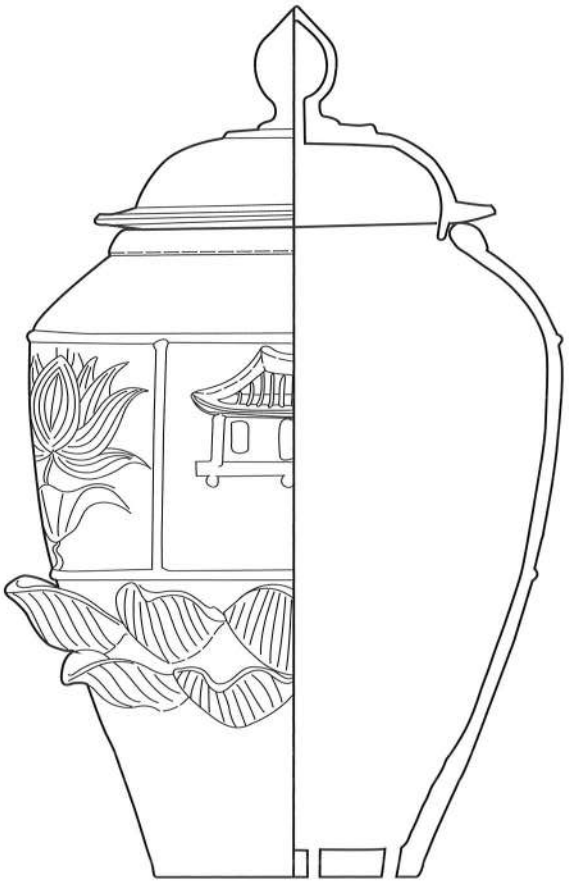
厨子 10

0 30cm

S=1/6



厨子 11



厨子 12

れている。印の形状は不明である。マド枠下部には銘書が墨書きされている。書体は達筆である。

厨子１２はボージャータイプの厨子である。蓋頭頂部には大きめの擬宝珠が確認できる。擬宝珠部分をのぞいた蓋表面全体にマンガン釉が施されている。ただしかなり荒い施釉である。蓋裏面は施釉されておらず、銘書が墨書きされている。身は釉薬が施されていない。かなり胴部が張る形状を有している。後円部は内側に湾曲しており、口唇部は丸みを帯びている。胴部正面には寄棟形の１方２方のマド枠が確認できる。マド枠以外の胴部には蓮華の文様が装飾されている。ただしマド枠両側面の蓮華文は線彫りで描かれているのに対し、それ意外の蓮華文は貼り付けで表現されている。胴下部には蓮弁をかたどった装飾が、全体に施されている。蓮弁は２段に渡り、胴下部を囲む形状を有している。

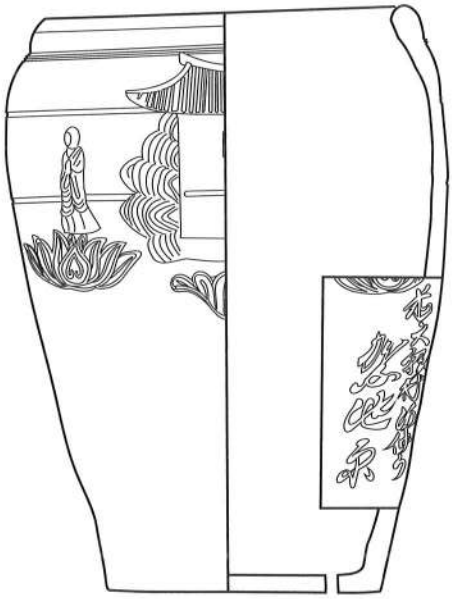
厨子１３はボージャータイプの厨子である。蓋はなく、身のみである。表面、裏面ともに施釉されていない。口縁は丸みを帯びており、肥厚は厚くなっている。前期のボージャー厨子のタイプである。正面には貼付けの寄棟形のマド枠があり、1方の孔が空けてある。マド枠は通常のボージャー厨子と比較して縦長になっており、マド枠に接する形で両側に蓮弁、下部には蓮華が貼り付けで装飾されている。また両側面には法師像および蓮華の装飾が貼付けられている。正面向かって右側に銘書が墨書きされている。

厨子１４は甕型厨子である。全体に飴色の釉薬が施釉されている。またその上に黄色の掛け流しが施されている。内面にも施釉されており、上面は黒く発色、下方は褐色に発色している。本体は頸部を形成し、肩はあまり張らない形をとっている。正面には瓦屋型の屋門が線彫りされている。マド枠には孔が３つ空けられており、菊花文と思わしき印が２点確認できる。屋門には柱及び柱貫のようなものは描かれているが、一本の線で描かれているため柱及び柱貫であるか不明である。柱と思わしきものの周辺には蓮弁文が線彫りされている。また、溶着したものを剥がしたであろう跡も確認できる。また胴部に煙管の吸い口が４点、底部に煙管の雁首が４点溶着しているのが確認することができる[1]。

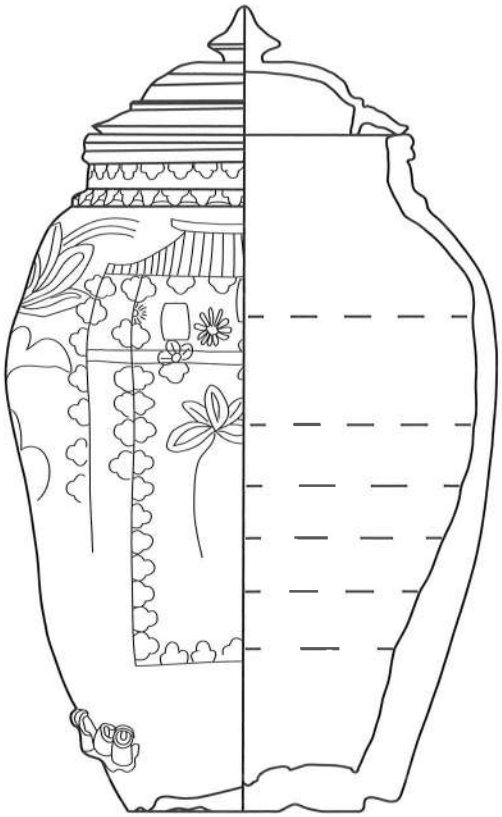
厨子１５はマンガン掛け庇つき焼締め厨子である。全体的に釉薬が施されているものの、蓋は光沢があるのに比べて身は光沢がなく粗い作りとなっている。蓋は擬宝珠が付いており、四方に鯱を模した形状の彫刻が確認できる。また刷毛目が側面に数カ所確認できる。内側は無釉であり赤色が強く。銘書が墨書きされている。身の表面は荒いながら施釉されている。口縁部は平坦に形成されている。肩部文様帯および胴下部文様帯には波状文が施されている。同部文様帯には正面に屋門が貼り付けで施され、形は位牌形である。位牌の下部分のみ釉薬が施されておらず、無釉部分がむき出しとなっている。おそらく銘書をかくために空けていたと考えられるが、銘書は確認できない。屋門の側面には貼り付けで法師像および蓮華文、蓮葉文が確認できる。茎部は線彫りで表現されている。

厨子１６はマンガン掛け庇つき焼締め厨子である。蓋、身ともに表面にはマンガン釉が施されている。ただ蓋の方が施釉は荒い印象を受ける。また蓋、身ともに内側には釉薬は施されていない。蓋は擬宝珠がついており、屋根は２段の庇を有している。上段は瓦を表

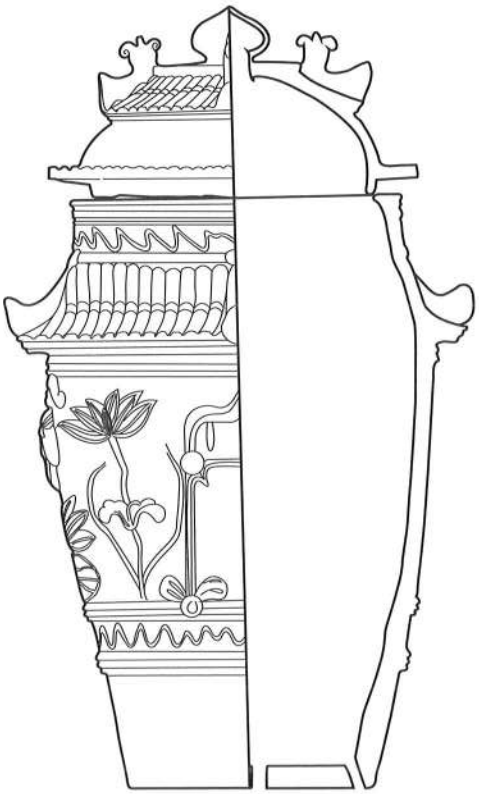
0 30cm
S=1/6



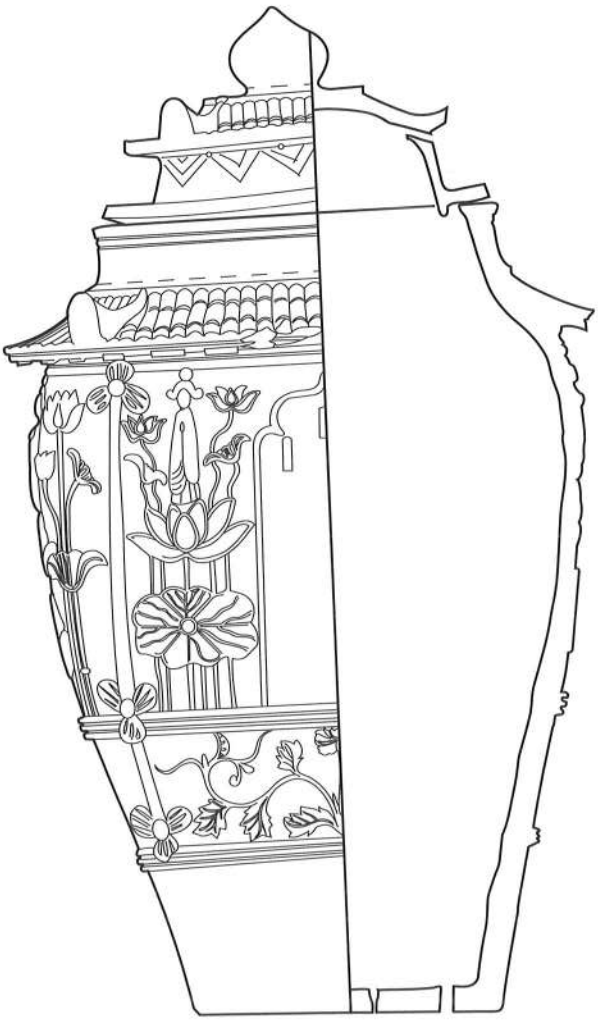
厨子 13



厨子 14



厨子 15



厨子 16

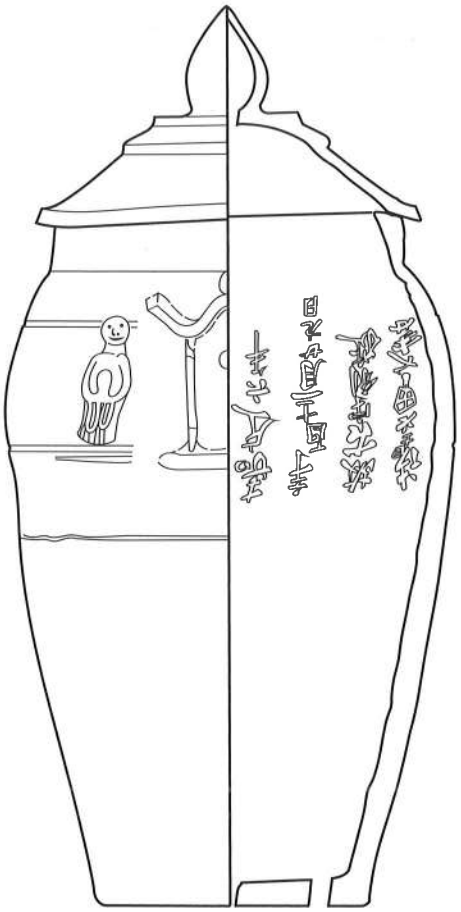
現しているが、下段には瓦の装飾が施されてない。所々釉薬がはがれている。内側に銘書が墨書きされている。身は表面全体に釉薬が施されているものの、底部周辺は釉薬が剥がれている。口縁部は直口型であり、上部は平坦に形成されており、釉薬は施されていない。胴部および胴下部に文様帯がある。胴部文様帯正面には位牌形の屋門が貼り付けで施されている。孔は３つ空けてある。屋門内側は無釉である。屋門部分以外には、法師像、蓮華、蓮弁が貼り付けで装飾されており、茎の文様も貼り付けで表現されている。胴下部文様帯には唐草文が貼り付けで表現されている。

厨子１７はボージャー厨子である。蓋、身ともに飴釉で厚く施釉されており、光沢がある。内面は無釉であり、轆轤目が確認できる。土の色調は白が強く、壺屋の赤い色調の焼成とは一線を画す。蓋はかぶせるタイプのものであり、頭頂部に縦長の擬宝珠を有している。内側には銘書が墨書きされている。身を見ると、数カ所刷毛目が確認できる。口縁部は直口型である。口唇部は平坦に形成されており、釉薬は施されていない。正面にはマド枠のあり、形状は唐破風形１円、丸い孔が１つ空けてある。マド枠の両側面には法師像がはりつけてある。内側には、マドのちょうど後ろに銘書が天地逆転に墨書きされている。書体は蓋の銘書と比べ、達筆な印象を受ける。

厨子１８は庇付厨子である。蓋、身ともに飴釉が施されている。身の方が若干黒色が強い印象を受ける。蓋頭頂部には大きめの擬宝珠が確認できる。庇は２段構成されており、上段には瓦の表現がなされている。蓋裏面は施釉されておらず、銘書が墨書きおよび朱書きされている。縁の部分も含め全体的に銘書は確認できる。身はマンガン釉庇付厨子の形状を有しており、全体に飴釉が施されている。口縁部は直口しており、口唇部は内湾している。胴部正面には瓦屋形の屋門が確認できる。屋門下部には施釉されておらず、その部分に銘書が墨書きされている。屋門の両側面には唐草文、蓮華に載った法師像が貼付けて装飾されている。身内側は口縁部までは施釉されているものの、基本的に無釉である。内面は黒色が強い色調である。

厨子１９はマンガン掛け庇つき焼締め厨子である。蓋、身ともにマンガン釉が施釉されており、黒色の光沢のある色調を有している。蓋は頭頂部に擬宝珠が付いており、庇上段は瓦を模した形状となっている。正面には　蓋の４隅には龍と獅子の頭部をかたどった装飾がなされている。正面の龍の装飾は、尾が擬宝珠とつながる構造を有している。蓋裏面には、胎土の赤色の色調が確認できる。また縁に沿って、銘書が墨書きされている。身の口縁部は外反しており、口唇部は無釉で平坦に形成されている。肩部文様帯には鳥の装飾が複数貼付けてある。庇部分には正面に龍の頭部、それ意外には獅子の頭部が彫刻してある。胴部正面には唐破風形の屋門が形成され、孔の下には法師像が貼付けられてある。両側面には、瓦屋や蓮華文が線彫りで描かれている。胴下部文様帯には、線彫りの波状文の上に、鳥や魚の装飾が貼付けられている。

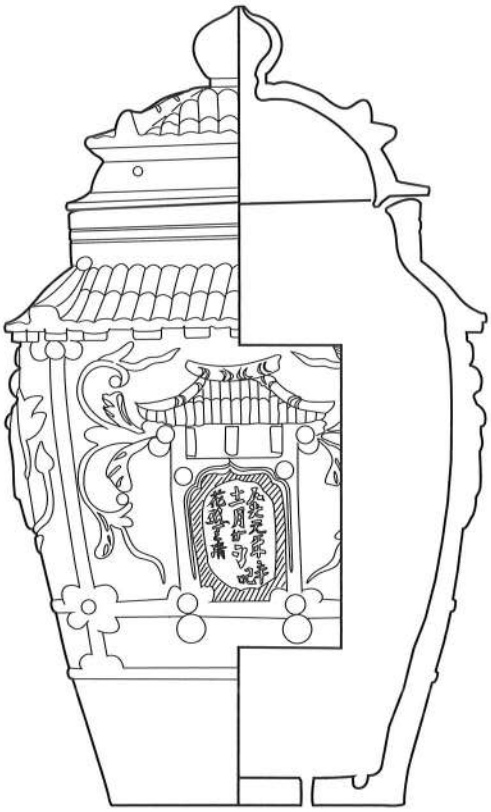
厨子２０は甕型の上焼コバルト掛け厨子である。表面は蓋、身ともにコバルト釉、緑釉、褐釉を中心とした色で彩られている。蓋頭頂部には小さめの擬宝珠が付いており、蓋の４



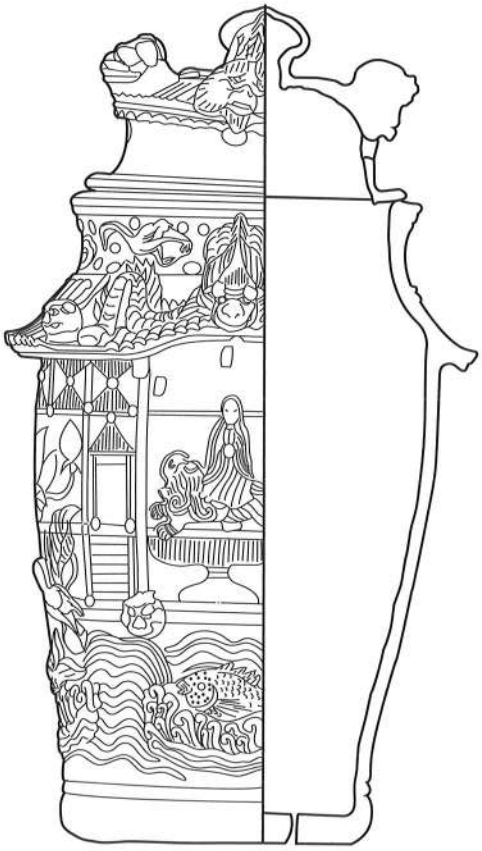
厨子 17

0 30cm

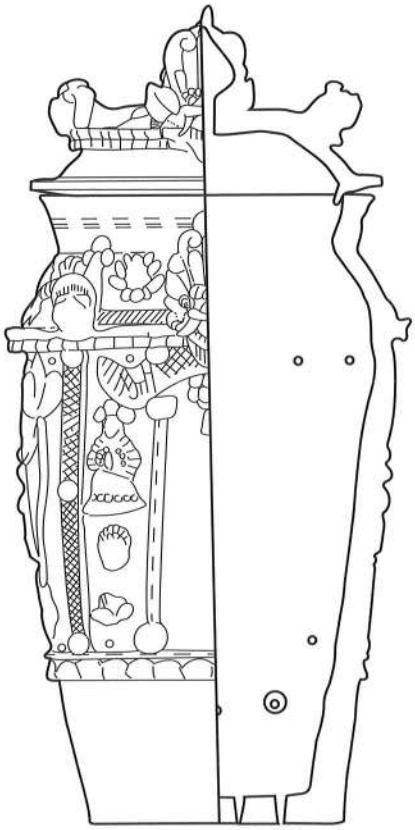
S=1/6



厨子 18



厨子 19



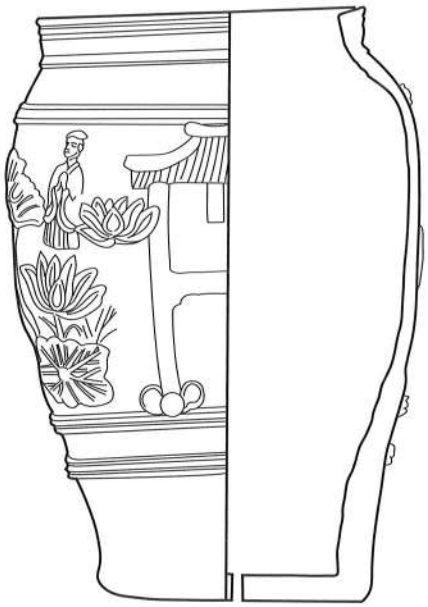
厨子 20

隅には龍と獅子の頭部をかたどった装飾がなされている。正面の龍の装飾は、尾が擬宝珠とつながる構造を有している。縁はコバルト釉と褐釉が交互に塗られ、上部には緑釉が施されている。裏面には銘書が墨書きされている。胎土は白い。身は胴部の張りがあまりない形状をしている。口縁は外反しており、口唇部は無釉で平坦に形成されている。肩部には宝珠の文様が貼付けされていて、コバルト釉で装飾されている。胴部正面には唐破風形の屋門が確認できる。両側面には貼り付けの法師像、蓮華、蓮弁が装飾され、いずれも緑釉、コバルト釉で施釉されている。底部付近は施釉されていないが、内側は透明釉で施釉されている。

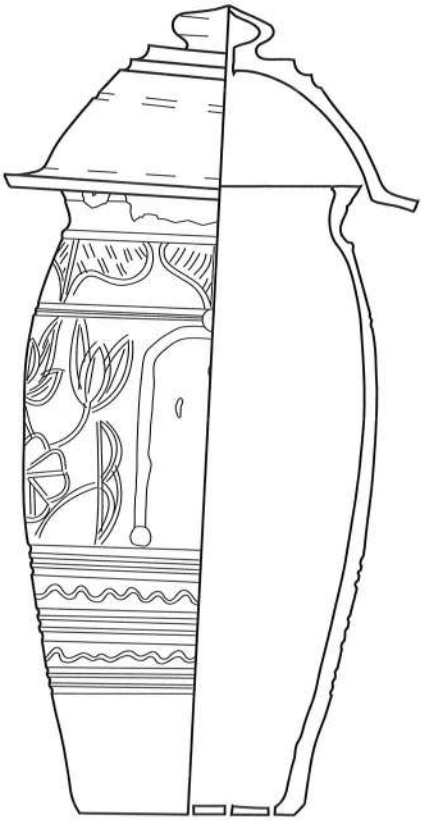
厨子２１はマンガン掛け庇つき焼締め厨子である。蓋、身ともに全体にムラなくマンガン釉が施釉されている。蓋の頭頂部には擬宝珠が付いており、庇は２段確認できる。庇上段には瓦が表現されているが、下段には表現されていない。また庇上段の４隅には獅子の頭部の装飾が見受けられる。蓋裏側には銘書が墨書きされている。身の口縁部は直口型であり、口唇部は施釉されていない。口唇部は平坦に形成されており、墨書きされた銘書が身受けられる。肩部、胴部、胴下部には文様帯が確認できる。肩部には正面に龍の装飾があり、それ以外の面には火炎宝珠を取り囲む龍の装飾が貼り付けで装飾されている。胴部正面には唐破風形の屋門が貼り付けで施されており、両側面には蓮華に座した法師像の装飾が貼付けられている。その他の面には蓮華の装飾が見受けられる。一部線彫りが確認できるが、大半が貼り付けである。胴下部には獅子および魚の装飾が貼付けられている。

厨子２２はマンガン掛け庇つき焼締め厨子である。蓋はなく、身のみである。表面はマンガン釉が施されているもの、装飾部以外は荒い施釉となっており、所々に赤黒くなった胎土が見受けられる。また焼成が強かったせいか、全体的に掠れた色調である。口縁部は外反して直口型であり、口唇部は平坦、無釉である。胴部文様帯のみ装飾が確認でき、肩部および胴下部の文様帯は無文である。なお肩部に沿って銘書が墨書きされている。胴部正面には瓦屋形の屋門が確認でき、孔は１方である。屋門両側面には、法師像および蓮華が貼付けられており、いずれもマンガン釉が施されている。装飾はこの両側面に留まり、裏面には見受けられない。ただし、裏面には銘書が墨書きされていることが確認されている。

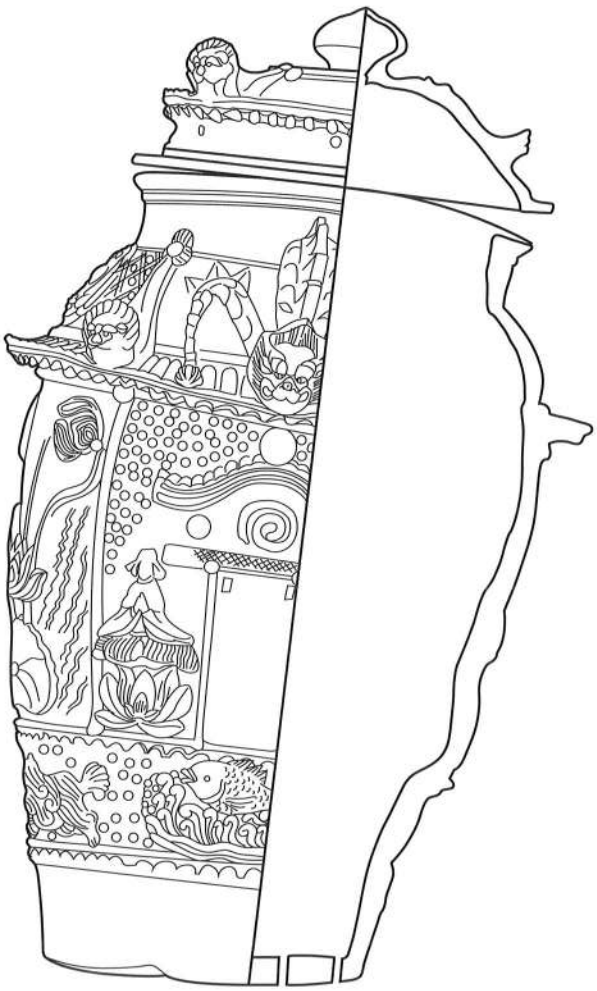
厨子２３は甕型厨子である。胴部に張りのない筒状の形状を有している。蓋、身ともに表面にはマンガン釉が施されている。たどちらも荒く、光沢はない。また蓋、身ともに内側は無釉薬である。蓋は擬宝珠が付いており、内側には縁にそって銘書が墨書きされている。身は口縁部および底部に石灰の付着が確認できる。口縁は外へと直行する形状を有している。口唇部は平坦に形成されており、釉薬はここまで施されている。肩部、胴部、胴下部に文様帯が形成されている。肩部文様帯には蓮弁文が線彫りで装飾されている。胴部文様帯には正面にアーチ形の屋門が貼り付けで装飾されており、孔は３つ空けてある。周囲には簡易な蓮華文が線彫りで表現されている。胴下部文様帯には波状文が２段にわたり形成されている。



厨子 22



厨子 23



厨子 21

4．まとめ

最後に、これまで記述してきた紀年銘入厨子の特徴について述べていく。厨子の銘書は、焼成前に直接彫り込まれたものと焼成後墨書きしたものの２種類がある。大多数は墨書きしたものであり、彫り込んだものは少量にとどまるとされている（池田 2001）。しかし今回紹介した厨子は、墨書きされた厨子と同数以上の、銘書が彫り込まれた厨子が確認された。銘書を彫り込まれた厨子は焼成前に記す必要があるため、墨書きされた厨子よりも手間のかかる作業と考えられる。また今回確認された彫り込まれた厨子は、字体も整っており、焼成・装飾ともに重厚な造りであることがうかがえる。

そして今回確認された紀年銘は全て 18 世紀以降であった。これは 18 世紀後半から厨子使用階層の拡大と広範化がすすむというこれまでの考えに沿う形となっている。しかし、装飾はマンガン掛け焼締め厨子の特徴を持つが形状はボージャー厨子のもの、あるいは底部に脚がつくものや胴下部に蓮弁を装飾するものなど、これまでの基準では分類しきれない厨子が多数存在しており、これは厨子の多様性を示唆するものである。そういった資料に紀年銘の存在が確認できたことは、厨子における年代の考察に非常に有効なものと考えられる。

同コレクションは、常設展・企画展ですでに活用されており、２０１４年１１月１日（土）から１２月２１日（日）まで開催した特別展「沖縄宗教藝術の精華・厨子　～門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念特別展～」では今回紹介した厨子の他にも貴重なコレクションの中核である厨子を公開し、入館者が一万人を超す盛況ぶりであった。文化財を適切に保存してこられた門上秀叡・千恵子両氏と、資料譲渡にご尽力いただいたご遺族、関係者の皆様に感謝を申し上げる。また本稿執筆に当たり、倉成多郎氏、徳元剛氏、翁長正行氏、勝野久美子氏、磯ヶ谷真依氏、鈴木悠氏に多大なる協力を頂いた。末筆ながら感謝申し上げる。

引用参考文献

安里進　1997　「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者　－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『浦添市文化財研究調査報告書』 第 25 集　浦添市教育委員会

安里進　2003　『中城村字津覇・呉屋家の墓被葬者の家族復元』浦添市教育委員会

安里進・新里まゆみ　2006　「比嘉門中墓の家族史　－家族の数だけ歴史がある－」『浦添市文化財調査研究報告書』

池田榮史　2001　「琉球の近世紀年銘陶器資料について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 89 巻下巻　国立歴史民俗博物館

上江洲均　1980　「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺　歴史・民族篇』 国分直一

博士古稀記念論集編纂委員会
浦添市教育委員会　1985　「チヂフチャー古墓群調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』第8集　浦添市教育委員会
金武正紀　2007　「第6章　考古学から見た銘苅古墓群」『銘苅古墓群』那覇市文化財調査報告書第72集　那覇市教育委員会
鈴木悠　2014　「第5章　銘書の分析」『前田経塚近世墓群5』浦添市文化財調査報告書　浦添市教育委員会
那覇市立壺屋焼物博物館　2005　『銘苅古墓群　－蘇った先祖の眠る大地－』
名嘉真宜勝　1978　『沖縄の厨子甕展』　読谷村歴史民俗資料館
西銘章　2004　「厨子研究における方法論の検討(1)　－久米島ヤッチのガマ資料の検討－」『地域文化論叢』第6号　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
西銘章　2005　「厨子研究における方法論の検討(2)　－ボージャー厨子の初現と終末期のタイプ－」『地域文化論叢』第7号　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
吉田健太　2010　「系図・家譜と考古学　－厨子甕分析を通して－」『系図・家譜と祖先認識　－東アジアの中で考える－』琉球大学史学会第43回公開シンポジウム資料集
吉田健太　2011　「厨子を通してみえること　－考古学的成果と課題－」『壺屋焼物博物館紀要　第12号』　那覇市立壺屋焼物博物館
琉球政府文化財保護委員会　1957　「浦添ようどれ」『指定文化財解説』1956年度版琉球政府文化財保護委員会

1 厨子に溶着した煙管の検討については拙稿2013「門上秀叡・千恵子コレクションにおける厨子溶着煙管の検討」『壺屋焼物博物館紀要』第14号に詳しい。

表３　甕型厨子銘書一覧表

整理番号	図版番号	銘書内容	被葬者
189	厨子1	【蓋】康熙五十四乙未／八月十五日大里間切／東風平村知念掟親雲上／歳七十六同人男子／かま歳七同人男子／徳歳三男孫／三ら歳五	〈１〉知念掟親雲上〈２〉同人男子かま〈３〉同人男子徳〈４〉同人孫三ら
92	厨子2	【蓋】　雍正二年／辰七月九日／■骨取申／安室村佐久／■■大小男子／なひこ■長	〈１〉なひこ■長
4	厨子3	【身】法司翁氏稲嶺親方盛方号瑞雲／大清康熙五十三年甲午五月廿六日卒／盛方室武氏号温心／大清康熙五拾七年戊戌九月十六日卒／同雍正五年丁未季秋日納骨	〈１〉翁氏稲嶺親方盛方〈２〉室（武氏）
壜	厨子4	【蓋】翁氏呉屋親雲上盛/周先室浦添間切城/間村石原掟親雲上女/思玉金號久繁/大清康熙六年丁未四月/十九日卒/盛周次男呉屋子/盛徳號瑞雪/大明順治十七年/庚子十二月九日/卒/大清雍正五年/丁未季日以新/壜改納	〈１〉翁氏呉屋親雲上盛周先室思玉金〈２〉同人次男呉屋子盛徳
7	厨子5	【蓋】雍正拾年壬子／九月三日／洗骨／元氏/■/比嘉筑親雲上／女房　【身】回〔記号〕/仲■■/山城筑登之	〈１〉比嘉筑登之親雲上女房〈２〉山城筑登之
186	厨子6	【身】雍正十年癸丑七月十三日／道性幻露善童子／若文子いりい之大濱にや二男／かま戸	〈１〉大濱にや二男かま戸
11	厨子7	【蓋】雍正十三乙卯十一月十六洗骨／崎間親雲上男孫五ら【身】■久田村崎間親雲上／家石／康熙二十一年壬戌七月八日	崎間親雲上・男孫五ら　2名
37	厨子8	【身前】■■■〈判別不能〉／■■■〈判別不能〉／■■■名号瑞出／乾隆二年丁巳閏九月〈判読不能〉／洗骨仕候也	〈１〉不明
67	厨子9	〈蓋〉乾隆拾弐年乙寅卯八月廿二日石川筑登之親雲上洗/此壺二孫亀混安座仕也/乾隆弐拾八年癸未九月廿五日■石川筑登之妻洗骨/~~乾隆拾二年/■卯八月二十二日/石川筑登之親雲上~~/此墓戊年二石川筑登之親雲上仕立之【身】嫡子/国場筑登之親雲上／乾隆二年午四月／嫡子国場筑登之親雲上／女房／乾隆七年戊八月二十三日	〈１〉石川筑登之親雲上〈２〉石川筑登之妻〈３〉孫亀〈４〉国場筑登之親雲上〈５〉同人妻
14	厨子10	【身】大清乾隆拾八年癸酉十二月三日／拾五歳去童名徳名■登川仁屋／次甲戌七月七日祖母懐葬	〈１〉登川仁屋〈２〉祖母
44	厨子11	【身・前】班廷爵／外間筑登之親雲上守長女真多知／乾隆四十年乙未八月廿日洗骨/〈判読不能〉守長真多知〔朱字〕	〈１〉外間筑登之親雲上守長（班廷爵）女真多知
25	厨子12	【蓋】乾隆四十三年戊戌七月／七日為洗骨／但本生浦添間切／宮城村にて候／恩孫美里按司／為乳母古来／子孫之者共為納／得委く記之	〈１〉美里按司乳母

66	厨子13	【身】大清■乾隆四拾七年／壬寅七月八日先清／前天願村■■■／かな池原	〈1〉かな池原
K-8	厨子14	【蓋】　乾隆五拾五年庚戌七月／儀保筑親雲上男子／かな儀保	〈1〉儀保筑登之親雲上男子かな儀保
185	厨子15	【蓋】大清隆申■四月十四日／■■■■死去／胡屋筑親雲上／同寅■六月九日／胡屋筑親雲上妻／附／大清嘉慶／六年甲戌十一月／十一日二御入被成／候事記之／置候事／右此墓仕立申／候儀ハ親類中二テ／相仕立候事／於跡々ハ此主 【蓋】嘉慶三年丙午七月六日西原村伊礼むと金城	〈1〉呉屋筑登之親雲上〈2〉同人妻
178	厨子16	【蓋】嘉慶三年丙午七月六日西原村伊礼むと金城	〈1〉むと金城
53	厨子17	〈蓋〉〈判別不能〉/〈判別不能〉/〈判別不能〉/〈判別不能〉/丑…/両人/■■■■/宮城■/屋我屋■/女■■■ 【身】嘉慶六年／辛酉十二月廿九日／故古宇利掟／諸喜田にや妻	〈1〉故古宇利掟諸喜田にや妻
18	厨子18	【蓋】三世名嘉真親雲上祥昆　嘉慶十八年癸酉四月十四日洗骨　同人妻同廿一年丙子四月二日洗骨／~~道光元年辛巳十一月廿六日知花親雲上清順妻洗骨/~~ 〔朱字〕〈身〉光元年辛巳/十一月廿六日知/花親雲上清順■〔妻ヵ〕	〈1〉名嘉真親雲上祥昆〈2〉同人妻
K-4	厨子19	【蓋】■■之頭宮良親雲上當宗明治参拾丁酉年旧八月貳拾九日卒去同参拾■〔四ヵ〕辛丑年旧拾■月■日洗骨■■寿六拾五歳／當宗室久屋真合葬	〈1〉宮良親雲上當宗〈2〉當宗室久屋真
188	厨子20	【蓋】　頭大浜親雲上當著室真和津寿徳沙恵信女明治廿六年癸巳旧六月三十日卒寿七十七明治三十三年庚子旧潤[閏ヵ？]八月七日洗骸	〈1〉大浜親雲上室真和津
180	厨子21	〈蓋〉東リ池ノ二男／樽／越来村四百六十一番地四九七／家号具志川／明治参拾六年■卯十月廿一日亡〈判読不能〉 〈身〉明治参拾六年癸卯十月廿一日亡高江洲樽家号具志川 ※身の内側に「回」の記号あり	〈1〉高江洲樽
56	厨子22	【身】〈判読不能〉■■六日嫡子外間筑親雲上守熙女子真嘉戸／守熙妻／女子■■■／合葬／明治四■■■／旧五月■■■／■■■〈判読不能〉	〈1〉外間筑登之親雲上守熙妻〈2〉女子真嘉戸
K-7	厨子23	【蓋】啓心祖道信士　昭和七年壬申新四月廿三日大浜當芳逝去享年四十三、昭和十九年十二月五日洗骨改葬 【身】〈判読不能〉洗骨/〈判読不能〉信女/〈判読不能〉■■■〔三十六ヵ〕年卯三月■■日■■洗骨	〈1〉大浜當芳〈2〉某信女